第85回東京箱根間往復駅伝競走総合優勝讃歌　（郡山　直　作詩）

評釈

この詩には、平易な詩文の中に、東洋大学に関係する者が待ちに待った箱根駅伝初優勝の興奮が満ちていて、躍動感もある。

1連と2連、「君は見たか」、「・・・1月2日」柏原、「1月3日」高見が「テープを切ったのを」を繰り返し、そのリズムがとてもよい。

3連では、テープ切った柏原と高見のあとの走者の名前を並列し、川嶋伸次監督に鍛えられた健脚が名字(みょうじ)4人ずつ整っている。名字を並べただけでポエジー（詩）になるものも箱根駅伝という正月の風物詩の魅力に因るものだ。

4連、大学創立から120余年の歴史の中で、「これほどの・・・・・」快挙、喜び、興奮、驚き、（大）騒ぎという発奮の言葉を並列しているが、実に盛り上がり、雰囲気も十分出ている。

全国の東洋大学ファンのこの駅伝に対する期待感を率直に表現し、かつ全国に散在する卒業生が嘻嘻として、そして涙して祝杯を挙げている光景や姿が目に映るし、その雰囲気も伝わって来る。

5連は、箱根駅伝と不可分の東洋大学卒業生、名高いふたりである。

勝承夫（かつよしお）は、明治35（1902）年生まれ。東洋大学理事長や日本音楽著作権協会々長などを歴任した詩人にして作詞家である。昭和中期の歌謡曲「燈台守」、童謡「歌の町」や文部省唱歌の作詞家として高名。第60回箱根駅伝大会を記念して、「駅伝を讃えて」の石碑が箱根芦ノ湖の湖畔に建っている。讃歌の中で、スポーツの美を讃えつつ「よろこびと涙を分かち合う二百二十キロ、若い日の楽しい感激よ」と結んでいる。

植木等（うえきひとし）は、昭和元（1926）年生まれ。東洋大学の「箱根駅伝で優勝させる会」の初代会長だった。周知のごとく戦後の名俳優、高い才覚あるタレント。また世相を反映した歌謡曲「スーダラ節」、映画「ニッポン無責任時代」が大ヒット。

この駅伝の初優勝を見ずして、平成19（2007）年に逝去した。残念でならない。

最後の連は、白山台上にあった古い学舎(まなびや)を並べている。

旧大講堂、蔦で覆われた旧図書館、美しい桐の木の花。四聖館（旧5号館）、これらの建物は、古いながらも大切な学舎であり、卒業生の心の中のモニュメントである。

「これらを覚えている世代も、知らない世代も」みんな東洋大学‘人’だ。老若男女をこれらの学舎で統一し、学んだ者みな、この大勝利の歓喜に酔いしれている。

明晰な詩文、日常のきれいな言葉のリフレイン（繰り返し）が見事に詩情を醸し出している。

駅伝の勇者たちの力走を思い出させ、読む人の心を高揚させる詩心と詩作の技倆が、この詩人には具(そな)わっている。二日間の華麗な若人の走りを讃えたこの詩は心に残り美しい。

藤野文雄(東洋大学名誉教授)